

>シンポジウム 1

開催形式:ライブ配信

離島・へき地における ICT 利活用の現状と地域包括ケアシステムの推進(公募企画)

企画責任者 中村 浩士(呉医療センター・中国がんセンター 総合診療科(兼)臨床研究部)

座 長:中村 浩士(呉医療センター・中国がんセンター)

演 者:『遠隔・オンライン診療の現状』

長谷川 高志(特定非営利活動法人日本遠隔医療協会 特任上席研究員)

『ICT やスマホを活用した総合診療医のタスクシフト』

本村 和久(沖縄県立中部病院総合診療科)

『へき地医療の推進に向けたオンライン診療体制の構築』

原田 昌範(山口県立総合医療センター へき地医療支援センター)

『情動・痛みのデジタル化と新しい生活様式(Society5.0) の提案』

中村 浩士(呉医療センター・中国がんセンター 総合診療科(兼)臨床研究部)

[開催の目的]

地域包括ケアシステムの推進

[概要]

ICTによる医療オペレーションシステムの改革、ビッグデータやリアルワールドデータを活用した臨床研究、個別化医療を目指したマスカスタマイゼーションや地域におけるオンライン/遠隔医療等も急速に進んでいる。AIにビッグデータを与えることにより、単なる情報解析だけでなく、複雑な医療判断を伴う医療行政や福祉サービスの提供が可能となるとともに、様々なヘルスケアの解決に資することも期待されている。本シンポジウムでは、こうした第4次産業革命の概要や現時点における医療状況等について確認するとともに、IoT ウェアラブルデバイス × AI による地域包括ケアシステムの推進戦略を討議したい。

>シンポジウム 2

開催形式:ライブ配信

総合診療科の作り方(公募企画)

企画責任者 大杉 泰弘

(藤田医科大学 総合診療プログラム/豊田地域医療センター 総合診療科)

司 会:大杉 泰弘

(藤田医科大学 総合診療プログラム/豊田地域医療センター 総合診療科)

演 者:近藤 敬太(豊田地域医療センター 総合診療科)

『大学病院での総合診療科立ち上げ～大学と市中のコラボレーションを目指して～』

山田 徹(東京医科歯科大学総合診療医学・総合診療科)

『いきあたりばったりの飯塚病院総合診療科』

井村 洋(飯塚病院総合診療科)

[開催の目的]

2018年4月総合診療専門医プログラムが開始され、全国の病院で総合診療科やプログラムの立ち上げが増加しております。しかし、私達医師は組織の立ち上げや運営について体系的に学ぶ機会はなく、手探りでやっていることが多いのではと思います。今回病院において総合診療科やプログラムの立ち上げを行った施設や責任者のノウハウを設立期・運営期・維持期に分けて共有しワークショップを行いたいと思います。具体的な内容としては、人材の確保マネジメント・お金周り・病院内での立ち振舞・組織構造の構築・理念/ビジョンの構築・医師のスキルなどについて学びを得られるものしたいと思います。

[概要]

総合診療科の中で、1. 大学病院・大病院の総合診療科(総合内科)の立ち上げと、2. 中小病院における総合診療科(家庭医療科)の立ち上げの2つに分けてディスカッションをしていきます。まず、飯塚病院の井村洋副院長に飯塚病院という1,000床を超える大病院の総合診療科の立ち上げ・運営について発表いただき、大杉が豊田地域医療センター(150床)の中小病院の総合診療科の立ち上げ・運営について発表します。

次に、参加者に1, 2の興味のある側に分かれていただき、ディスカッションを行い、最後に全体で討論と質疑を行います。

現在、総合診療科の立ち上げや拡大をしている方、今後検討されている方に参加していた

 **第11回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会**

プライマリ・ケアと総合診療医学 ～学際的充実と伝承～
だきたく、学生から病院管理者の方まで幅広く参加できる形にしたいと思います。

＜シンポジウム 3＞

開催形式：ライブ配信

「総合診療医と腫瘍内科医の協働で切り拓く令和時代のがん診療」（公募企画）

企画責任者 瀬尾 卓司(国立国際医療研究センター病院)

座 長：東 光久(JA福島厚生連 白河厚生総合病院 総合診療科)

瀬尾 卓司(国立国際医療研究センター病院)

演 者：『腫瘍内科医からみたがん医療と総合診療の連携』

瀬尾 卓司(国立国際医療研究センター病院)

東 光久(JA福島厚生連 白河厚生総合病院 総合診療科)

『小児、思春期・若年成人世代がん経験者の健康管理におけるプライマリケアへの期待』

清水 千佳子(国立国際医療研究センター病院 がん総合診療センター 乳腺・腫瘍内科)

『二次的にみつかると遺伝性腫瘍の家系員への対応～がん治療医と総合診療医の連携～』

下村 昭彦

(国立国際医療研究センター 乳腺・腫瘍内科/臨床ゲノム科)

『総合診療医からみたがん医療の現状と課題』

菅家 智史(福島県立医科大学医学部 地域・家庭医療学講座)

〔開催の目的〕

総合診療外来には様々な患者が受診する。鑑別診断に悪性疾患が挙げることが少なくな。悪性疾患が疑われた場合には可及的速やかな原発巣検索を求められる。

治療の発展により、がんサバイバーが増えている。専門医療機関で治療後、地域に逆紹介されることも多く、小児のトランジションも含め、晩期合併症の診療・二次がんの検診を担える医師の育成が急務である。

がんゲノム医療の普及により保因者のサーベイランスや予防医療のニーズが増すことが予想される。

小児から高齢者、患者家族も診療対象とする総合診療医が、ターミナルの患者・家族のケアに加え、がん患者・サバイバーの健康管理を腫瘍内科医と連携して行うことでがん診療の質向上に貢献できるはずである。

本シンポジウムを通じて、令和の新時代に相応しい、総合診療医と腫瘍内科医が協働してがん診療の未来を創るスタートにしたい。

[概要]

腫瘍内科医からみたがん医療と総合診療の連携

腫瘍内科医の視点から総合診療医へ期待している診療と現状を話す。

原発不明癌に出会ったときに総合診療医は何をすべきか:総合診療医から腫瘍内科医へのバトンリレー

専門診療科がない原発不明癌。どこまで検索をして原発不明癌と診断するのか?どのタイミングでコンサルトをするか?総合診療医が行う原発不明がん診療を紹介。

がんサバイバーの長期フォローアップ:腫瘍内科医から総合診療医へのバトンリレー

がん治療後は晩期障害や二次がんの検診が必要。がんサバイバーのケアを腫瘍内科医から提案する。

ゲノム医療と総合診療:二次的に遺伝性腫瘍所見が見つかったとき、家系員をどうフォローするのか?

遺伝子パネル検査が保険適応となった。家族を診療対象としている総合診療医にもその波が押し寄せている。総合診療医にどう影響するか?

総合診療医からみたがん医療の現状と課題

総合診療医の視点からがん診療の現状とこれまでの専門医との期待のギャップを明確にする。

>シンポジウム 4

開催形式:ライブ配信

処方箋の向こう側～薬剤師って何するひと?(委員会企画)

企画責任者 押切 康子(御代の台薬局品川二葉店)

座 長:石橋 幸滋(石橋クリニック)

坂口 眞弓(みどり薬局)

演 者:『あなたは「薬局薬剤師」を知っていますか?』

押切 康子(御代の台薬局品川二葉店)

『医学生・医師が薬剤師に関して、何を学ぶことになっているのか』

吉本 尚(筑波大学医学医療系 地域総合診療医学)

『病院で働く薬剤師は何をしているのか』

二瓶 大輔(平塚市民病院 薬剤部)

『在宅療養支援診療所薬剤師の業務や教育とのかかわり』

岡崎 理絵(医療法人社団鉄祐会祐ホームクリニック吾妻橋)

[開催の目的]

2019年夏期セミナーに薬剤師として参加しました。その折、参加されていた若手医師の方から、学校では薬剤師が何をやるのか教えてくれない、初期研修や後期研修でもほぼ関わることがない。「かかりつけ医」って言葉はよく使うけど、「かかりつけ薬局」「かかりつけ薬剤師」って言葉は大学でも、研修医になっても習ったことがなく、聞いたことがない。本学会では、プライマリ・ケア認定薬剤師の育成が行われ、多職種連携・協働に力を発揮したいと薬剤師は考えています。しかしながら、同じ学会の若手の医師の皆さんに薬剤師の業務や処方箋を交付されたあとのことを理解していただければ、将来の協働ができない!!という危機意識から、薬剤師についてもっと知っていただきたい!という思いから本シンポジウムを企画いたします。

[概要]

4名のシンポジストから薬剤師の業務内容、医師が受けてきた教育の一部について紹介させていただく。薬局薬剤師より薬剤師の仕事について、処方箋を受け取ったのちの業務、かかりつけ薬剤師のこと、OTC医薬品の販売や健康サポート薬局について紹介する。若手医師の方から、教育で薬剤師のことに触れられていない現状とご自身の中での薬剤師

に

に対する疑問などを伝えていただく。病院薬剤師から病院での薬剤師の業務や医師とのかわりについて紹介いただく。在宅支援診療所薬剤師から在宅現場で医師と協働されている工夫と医学生への薬局研修についてお知らせいただく。全体討論の場ではフロアで参加されている医師の立場から薬剤師に対する疑問などを整理し、討議したいと考えている。ベテラン医師である座長の経験を踏まえて今後の医師との協働のあり方を提示したい。今後の協働を検討する上で多くの医師、薬剤師の方にご参加いただきたい。

>シンポジウム 5

開催形式:ライブ配信

診療看護師導入という未来の医療への提言～多様な導入の可能性を探る～(公募企画)

企画責任者 久保 徳彦(国立病院機構 別府医療センター 総合診療科)

座長:久保 徳彦(国立病院機構 別府医療センター 総合診療科)
志水 太郎(獨協医科大学 総合診療医学)

演者:『診療看護師の動向と大学院課程における教育について』
浦中 桂一(東京医療保健大学大学院 看護学研究科)
『大学病院での今後の導入について』
小波本 直也(聖マリアナ医科大学病院 診療看護師)
『市中病院での今後の導入に向けて』
高橋 淳(医療法人社団仁成会 高木病院)
『離島での日本版 nurse practitioner 導入に向けた提言』
本田 和也(独立行政法人国立病院機構 長崎医療センター 脳神経外科)
『介護施設で働く診療看護師(NP)の活動報告』
廣瀬 福美(社会医療法人小寺会 介護老人保健施設 鶴見の太陽)
『これからの診療看護師への期待 ～医師の立場から～』
和泉 泰衛(長崎医療センター 総合診療科)

[概要]

超高齢社会、医療の高度化、在宅医療の推進などを背景に、2014年に医療介護総合確保推進法が成立し、「特定行為に係る看護師の研修制度」が創設された。実践的な理解力や思考力及び判断力並びに高度かつ専門的な知識及び技能が特に必要とされる38行為を、厚生労働省が特定行為と指定した。研修を受けた看護師は手順書下で特定行為を行うことが認められており、特定行為研修を一つでも受けた看護師は特定看護師とされるが、大学院修士課程で幅広く複数の特定行為研修を受け、資格認定試験に合格すると診療看護師の資格が与えられる。

米国の診療看護師は1965年に誕生し50年以上の歴史があり、大学院修士課程で資格を取り、医師と協働して患者を診療し処方を含む医行為を実施している。本邦の診療看護師は米国の診療看護師同様の活動はできないが、医師と連携し診療に携わり、病態生理学や薬理学の知識とフィジカルアセスメント能力を身につけ、特定行為を実施する技術をもつ。現在日本では、クリティカル領域とプライマリ領域(老年・小児)の診療看護師がおり、

様々な症状や疾患をもつ患者に対し、医師と連携し生活モデルを重視した医療の提供ができる。今後、医師と診療看護師がチームで連携し活動することにより、診療全体が効率的に動くと考えられる。

私共は、第9回・第10回本学会学術集会にて診療看護師の活動内容を伝えるシンポジウムを開催してきたが、今後は診療看護師の導入に向けた戦略を議論し、可能性を探っていく。本シンポジウムでは、はじめに診療看護師について総論的解説をいただく。次に大学病院、市中病院、離島、老健施設での今後の導入に向けてご講演をいただき、最後に医師の立場からご講演をいただく予定である。

本シンポジウムにて議論した内容を参考に、各施設で診療看護師の導入を検討し、将来的な導入に繋がることを願っている。

>シンポジウム 6

開催形式:ライブ配信

世界や WONCA に手が届く! ～若手医師にとっての短期国際交流プログラムの価値～
(委員会企画)

企画責任者 朝倉 健太郎(健生会 大福診療所)

座 長:吉田 伸(飯塚穎田家庭医療プログラム)

朝倉 健太郎(健生会 大福診療所)

小林 直子(富山市まちなか診療所)

演 者:『Differences in Medical Consultation style between UK and Japan. What can we learn?』

佐和 明裕(奈良県立医科大学附属病院 総合診療科)

『Differences in the roles of nurse between the UK and Japan』

長 哲太郎(大阪家庭医療・総合診療センター／ファミリークリニックなごみ)

『Next Generation GP – Leadership Program in UK. What we can learn for our communities in japan?』

下川 純希(宇部興産中央病院 総合診療科)

『The role of family doctors in Korea』

相馬 麻由子(富山大学附属病院 総合診療科)

『Coping with the aging population in Korea

--- In terms of medical insurance payment system ---』

佐野 正彦(汐田総合病院 神経内科)

『Differences of end-of-life care system in Korea and Japan』

倉田 房子(筑波大学附属病院 総合診療グループ)

[開催の目的]

高齢化やグローバリズムの波を受ける中、各国の医療を支えるプライマリ・ケアの役割はますます大きく変化しています。当学会では、英国家庭医学会(RCGP)、韓国家庭医学会(KAFM)、シンガポール家庭医療学会(CFPS)との協働事業としてプライマリ・ケア交換留学プロジェクトに取り組み、毎年、数名の若手総合診療医らに短期訪問、学術大会での発表の機会などを提供してきました。また、各国から派遣された海外若手医師らは、全国の総合診療研修施設で日本の現状を見聞し、相互交流を深めてきました。本事業の目的は、若手医師らが Global perspectives を涵養することを推進し、同時に短期留学で得た渡航経験・受け入れ経験を組織的に共有、当学会の専門職育成や対外活動のあり方に組み込ん

第11回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会

プライマリ・ケアと総合診療医学 ～学際的充実と伝承～

でいくことです。本企画では、交換留学経験者たちの学びを皮切りに、国際医療の推進、Think globally, Act locally の実践のあり方について議論したいと思います。

[概要]

企画前半は、日英・日韓・日星各プログラムの派遣者、日本を訪れた外国人若手医師のポスター発表を通して、彼らが何に興味関心を示し、何を学んだのか双方向に議論を行います。後半はパネルディスカッション形式とし、若手医師が国際交流に身を投じることから得られる価値とその発信のありかたについて、Interactive な議論を目指します。

>シンポジウム 7

開催形式: ライブ配信

地域でプライマリ・ケアを教える: 卒前、臨床研修、専門研修
(全国地域医療教育協議会との合同企画) (実行委員会企画)

企画責任者 松本 正俊(広島大学大学院医系科学研究科地域医療システム学)

座 長: 松本 正俊(広島大学大学院医系科学研究科地域医療システム学)

シンポジスト: 『地域におけるプライマリ・ケア教育』

前田 隆浩(長崎大学病院 総合診療科)

『卒前における地域基盤型医学教育の現状と課題』

高村 昭輝(金沢医科大学医学教育学講座 地域医療学講座)

『住民への健康増進活動を通じてプライマリ・ケアを学ぶ』

井口 清太郎(新潟大学大学院医歯学総合研究科 新潟地域医療学講座)

『地域における総合診療専門研修の展望』

横谷 省治(筑波大学医学医療系 寄附講座地域総合診療医学/北茨城市
民病院附属家庭医療センター)

[開催の目的]

地域におけるプライマリケア教育について、卒前から専門研修まで俯瞰する。本学会と全国地域医療教育協議会との合同企画である。

[概要]

近年、卒前教育における地域医療の占める割合が高まっている。加えて臨床研修における地域医療研修の厳格化、総合診療専門研修制度の開始など、地域におけるプライマリケア教育の重要性は増すばかりである。しかしながら卒前から卒後にかけて具体的にどのように地域でのプライマリケア教育を実践するかという知識や経験は不足している。本シンポジウムではまず、卒前→臨床研修→総合診療専門研修における地域医療教育の位置づけを確認し、

次に卒前地域医療教育について、諸外国および国内の先進事例の紹介を行う。さらに臨床研修における地域医療研修について、研修医の学びの充実度と満足度を上げる取り組みの紹介を行い、最後に本学会家庭医療専門医を地域で育てた経験を踏まえて総合診療専門研修プログラムにおける総合診療 I の展望を示す。これら講演を踏まえ、今後の地域におけるプライマリケア教育の在り方をディスカッションする。

＜シンポジウム 8＞

開催形式：ライブ配信

多職種で学ぶ！高齢者施設における感染管理・感染予防の Tips !
(中国ブロック支部企画)

企画責任者 篠原 孝宏

(山口県立総合医療センター長州総合医・家庭医養成プログラム)

座長：篠原 孝宏(山口県立総合医療センター長州総合医・家庭医養成プログラム)
前田 和成(山口県岩国健康福祉センター/柳井健康福祉センター)

演者：『現場の感染対策の実際と課題』

藤本 真樹(福祉まちつなぎラボ コネクト・ワン)

『地域連携による取り組みから見てきた高齢者施設の現状と課題』

家入 裕子(山口県立大学 看護栄養学部看護学科/感染管理認定教育課程)

『高齢者施設における感染管理の考え方』

高山 義浩(沖縄県立中部病院感染症内科・地域ケア科)

[開催の目的]

高齢者施設に関する全ての職種が明日からすぐに役立つ感染管理・感染予防についての知識・技術を得ることを目標とする。また日常臨床での感染症についての悩み、課題についてインタラクティブに議論することでよりよい感染管理・予防を模索する機会とする。

[概要]

高齢者施設は感染症に対する抵抗力が弱い利用者が集団で生活する場であり、感染が広がりやすい状況にある。感染自体を完全になくすことはできないものの、集団生活における感染の被害を最小限にすることが求められる。このようなことから高齢者施設では、感染症を予防する体制を整備し、平常時から対策を実施するとともに、感染発生時には感染の拡大防止のため、迅速に対応することが必要とされている 1)。

本シンポジウムでは高齢者施設の感染管理に携わる様々な職種のエキスパートをお招きし、感染管理・感染予防に関しての明日から役立つ Tips についてご講演をいただく。また講演後のシンポジウムでは、施設での感染症についての悩み、課題についてシンポジスト、聴講者とのインタラクティブな議論を通じよりよい感染管理・感染予防について模索する。

高齢者施設に関する全ての皆さまに役立つ内容となっており、多数のご参加をお待ちしております。

 第11回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会

プライマリ・ケアと総合診療医学 ～学際的充実と伝承～

1)「高齢者介護施設における感染対策マニュアル改定版(2019年3月)」より引用

>シンポジウム 9

開催形式:ライブ配信

更年期女性の診療 ～専門医の視点をプライマリ現場に生かす～(委員会企画)

企画責任者 池田 裕美枝(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系)

座 長:樋口 毅(弘前大学 大学院 保健学研究科 看護学領域)
井上 真智子(浜松医科大学地域家庭医療学講座)

演 者:『更年期障害の診断とホルモン補充療法』

岡野 浩哉(飯田橋レディースクリニック)

大澤 稔(東北大学病院産婦人科)

『総合診療医の更年期症状へのアプローチ』

鳴本 敬一郎

(浜松医科大学産婦人科家庭医療学講座/森町家庭医療クリニック)

[開催の目的]

本企画は、日本女性学学会と日本プライマリケア連合学会のジョイントシンポジウムです。更年期女性のケアを中心に、専門医とプライマリケア医が相互理解を深め、より良い連携を展開することを目的にシンポジウムを行います。

[概要]

「更年期女性の不調に対して、自分がプライマリ・ケア医として最善のプラクティスをしている自信がなかなかもてない。」女性医療・保健委員会にはそんな声が数多く寄せられます。

そこで今回、日本の更年期診療をリードしている日本女性医学学会とのジョイント企画シンポジウムを開催します。更年期の健康特性、専門医による更年期症候群の治療の実際、より健やかな老年期にむけて有効なアドバイスなどを伺いながら、プライマリ・ケア医の役割を確認します。

また、婦人科漢方専門医を招き、加味逍遙散だけで終わらせない、更年期女性への漢方治療もお話いただきます。

家族の要、会社の要、地域の要であることも多い更年期女性。プライマリ・ケア医としての視点を大切にしながら専門医と連携し、更年期女性への best practice を目指しましょう！

＜シンポジウム 10＞

開催形式：ライブ配信

地域包括ケアでのプライマリ・ケア看護師の先駆的な役割(委員会企画)

企画責任者 森山 美知子(広島大学大学院医系科学研究科)

座長：森山 美知子(広島大学大学院医系科学研究科)
後藤 智美(生協浮間診療所)

演者：『プライマリ・ケア診療所が果たす地域包括ケアでの役割』

田中 亜紀子

(トータルファミリーケア北西医院／富士地域ケア総合診療センター)

『平時の産官学連携によるプライマリヘルスケアの創出「まちケア commons」』

神原 咲子(高知県立大学大学院 看護学研究科 共同災害看護学専攻)

『幸せに過ごせる地域づくりをデザインするかかりつけ看護師 アントレプレナーとしての挑戦』

藤野 泰平(株式会社デザインケア みんなのかかりつけ訪問看護ステーション)

『訪問看護と住民による通いの場を組み合わせた地域看護の実践』

吉江 悟(一般社団法人 Neighborhood Care 代表理事／

訪問看護ステーション ビュートゾルフ柏)

『地域連携のハブとしての家庭医診療所におけるプライマリ・ケア看護師の役割』

加藤 早里佳(みんなのクリニック大井町)

〔開催の目的〕

日本看護協会の重点政策の一つに「地域包括ケアにおける看護提供体制の構築」があげられているとおり、地域包括ケアの推進には診療所など地域で活動する看護師の役割は大きい。令和元年度に本学会認定によるプライマリ・ケア看護師が誕生した。彼らの幅広い活動を含め、プライマリ・ケア看護師は地域でどのような活動をしているのか。看看連携をどのように構築し、推進しているのか。地域の多職種とどのように連携し、ネットワークを構築しているのか。また、今後どのような活動が必要なのか、診療報酬につなげるにはどのように活動をまとめ、データを収集していけばよいかについて先駆的な事例を報告、またディスカッションしていきたい。

〔概要〕

プライマリ・ケア看護活動において日本を代表する4人の演者から、①診療所に位置して、地域包括ケアシステムを支える看護師の活動、②被災地の復興を支え、地域包括ケアを推進する取り組み、そして地域の災害のレジリエンスを高める取り組みを行う災害看護を専門とする看護師の活動、③訪問看護師がかかりつけとなり、住み慣れた地域で最期まで

Japan
Primary Care
Association

第11回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会

プライマリ・ケアと総合診療医学 ～学際的充実と伝承～
過ごせる町づくりをデザインするアントレプレニューアールとしての活動、そして、④住民主体の

通いの場を活かしたプライマリ・ケア看護を進める活動といった先駆的な実践を報告してもらい、ディスカッションを行う。

>シンポジウム 11

開催形式:ライブ配信

男もつらいよ ～男性医師の多様性を知ることからはじめる働き方改革～(委員会企画)

企画責任者 村田 亜紀子(奈義ファミリークリニック)

座長:蓮沼 直子(広島大学医学部附属医学教育センター)

後藤 理英子(熊本大学病院 地域医療支援センター)

演者:『後期研修プログラムの中断を経験し、半年の期間を経て研修再開した卒後
6年目医師の歩み』

木田 健介(沖縄医療生協 沖縄協同病院)

『やりたかった田舎の医療と、息子役割を意識してのキャリア選択』

藤原 靖士(ホームケアクリニック横浜港南)

『医師の個人力から多職種を巻き込んだ組織力へ

みんなが幸せになるための仕組みづくり』

佐々木 隆徳(みちのく総合診療医学センター／坂総合病院救急科)

『「働きやすさ」とは何か? 男性医師×育児の視点から』

神廣 憲記(医療法人耕仁会 札幌太田病院)

『「(地方)大学病院で、イクメン?」～底辺からボトムアップを目指して』

中田 健(大分大学医学部 腎臓内科／女性医療人キャリア支援センター)

『男性稼ぎ手標準の働き方からの脱却をめざして』

多賀 太(関西大学文学部)

企画者:西村 真紀

(医療福祉生協連家庭医療学開発センター／川崎セツルメント診療所)

浅川 麻里(堺市立総合医療センター総合内科／岐阜大学医学教育学)

岩間 秀幸(亀田家庭医総合診療専門医プログラム)

大原 紗矢香(はあと在宅クリニック)

加藤 大祐

(専門医部会若手医師部門 三重大学大学院医学系研究科臨床医学系講座
家庭医療学分野)

官澤 洋平(明石医療センター)

矢部 千鶴(津ファミリークリニック)

[開催の目的]

プロフェッショナリズムの名の下に長時間過重労働が常態化し、過労死やバーンアウトの危険性が高い「男性稼ぎ手モデル」が当然のように求められる状況が、男性医師には続いている。その配偶者である女性医師も時間制約から逃れられずキャリア形成に困難を来たしており、結果として「十分」に働ける医療者は減少傾向にある。

持続可能な地域医療を構築するためには男性も含めた医師全体の働き方の見直しが急務であるが、当事者である男性医師にはどのような思いやニーズ、考えがあるのだろうか。本シンポジウムではこれまで語られることの少なかった男性医師の多様性に着目し、直面する現状を明らかにして理解を深め、働き方改革の進みやすい土壌づくりにつなげることを目的とした。

[概要]

社会の求める男らしさと向き合ってきた4人の男性医師の生き方、やりがい、苦悩の語り、社会学からみた解説、社会的な取り組みをこのシンポジウムでは提供する。

語りとして、長男としての役割意識から将来的な両親のサポートを見据えて勤務先を選んできたベテラン医師、周りの男性医師の働き方に疑問を感じている悩める専攻医、働きやすい仕組みづくりに尽力している中堅管理職医師、当事者として働き方に悩んだことをきっかけに男性医師の働き方について研究をしている若手医師からお話いただく予定である。加えて、関西大学文学部の多賀太教授より男性のライフコースの多様化や生きづらさ、今後期待する展開について男らしさの社会学の視点から解説いただく。また、大分大学腎臓内科の中田健先生より、約5年ぶりとなる男性医師の育児休業取得者を実現するきっかけを作った社会的な取り組みである、大学内でのピアサポート活動「医療人パパの会」通称「THE PENGUINS」について今後の可能性を含めご紹介いただく。

以上を踏まえ、ディスカッションでは働き方改革を進めるために私たちがとれる行動について考えたい。

＜シンポジウム 12＞

開催形式：ライブ配信

総合診療医と多職種で支えるトランジション

～障がいをもつ人たちの成人期を見据えた医療にどう携わるか？（委員会企画）

企画責任者 高村 昭輝(金沢医科大学)

- 座 長：一ノ瀬 英史(いちのせファミリークリニック)
佐古 篤謙(三次市国民健康保険作木診療所)
- 演 者：『「障害児・者の相談支援から見えてくる、地域で暮らす課題」
～医療的ケア児・者の地域生活を支えるために～』
絹田 啓一(地域生活支援センターみまさか)
『重症心身障がいのあるご本人が加齢と共に医療が必要になった時、
支援者として感じた事』
中原 千(一般社団法人 とともに歩も一会 相談支援事業所ひととま)
『成人期を見据えた障害児と家族の早期からの支援：地域で支える医療・保
健、教育、福祉の連携構築を考える』
米山 明(心身障害児総合医療療育センター 小児科)
『障がいを持つ人たちに総合診療医はどう関われるのか』
杉山 由加里(社会医療法人宏潤会だいでうクリニック 在宅診療部(小児科・
緩和ケア内科))

[開催の目的]

医療の進歩に伴い、様々な疾患を抱えた子どもたちが成長できる社会になった。保護者や患者本人のニーズ、社会的資源の活用、そして、継続的に、且つ、総合的に対応していくための小児科、内科との連携がスムーズに行かない現状もある。持続可能な医療を実現するために総合診療医が成人期医療へのトランジションを見据えて、小児期から関わることは非常に重要である。

[概要]

この分野においては総合診療医がその能力を発揮し、子どもの頃から付き合っている場合は臓器別専門医のトランジションを、移行期から関わる場合は成人期診療をコーディネートし、メディカルホームのコンシェルジュとして患者家族と臓器専門医との橋渡し役を担うことができれば医療の質は格段に上がると思われる。今回は障がいを持つ子どもたちのトランジションについて小児科専門医の意見も交えて具体的に総合診療医と多職種で関わるべきトランジションの実践を探ってみたい。

>シンポジウム 13

開催形式:ライブ配信

日野原賞倶楽部 設立記念シンポジウム(委員会企画)

企画責任者 井上 真智子(浜松医科大学地域家庭医療学講座)

- 座長:井上 真智子(浜松医科大学地域家庭医療学講座)
前野 哲博(筑波大学 医学医療系 地域医療教育学)
- 演者:『受賞後7年経ち、診療所総合診療医としての Academic GP を模索中の一例』
佐藤 弘太郎(本輪西ファミリークリニック)
『マルチレベルな研究教育がもたらす研究推進の可能性』
後藤 亮平(筑波大学医学医療系)
『リサーチ・クエスチョンから英文原著論文可視化までの道程:石の上にも三年』
竹島 太郎(福島県立医科大学白河総合診療アカデミー)

[概要]

日野原賞とは、本学会の年次学術大会において最も優れた研究発表を行った若手研究者に与えられる賞であり、日本のプライマリ・ケア領域のパイオニアである日野原重明先生の業績を顕彰するために設けられている。この度、プライマリ・ケア、総合診療／家庭医療領域における研究活動をさらに推進するため、本学会の新たな部会として、日野原賞の受賞者を中心に構成される「日野原賞倶楽部」が設立された。本部会は、研究者ネットワークの形成促進、共同研究の実施、高等研究手法の追求や学会員への教育などの活動に取り組む予定である。本シンポジウムでは、その設立を記念し、「日野原賞受賞者のその後」として、メンバーの研究活動や経験に関する発表を行うとともに、本領域の研究活動推進における課題と、本部会の今後の活動方針に関する討論を行う。

>シンポジウム 14

開催形式:ライブ配信

大学でのキャリア選択、その多様性とこれから(委員会企画)

企画責任者 前田 隆浩(長崎大学病院 総合診療科)

座 長:前田 隆浩(長崎大学病院 総合診療科)

阿波谷 敏英(高知大学医学部医学科家庭医療学講座)

シンポジスト:『福井大学でのキャリア形成の夢と希望と勇気と野望』

林 寛之(福井大学医学部附属病院 救急総合診療部)

『複雑な社会情勢の中で地域とともに取り組む総合診療医の育成』

山城 清二(富山大学附属病院 総合診療部)

『「リサーチマインドを持ったプライマリ・ケア医」から「発信力と可視化力のあるプライマリ・ケア医」育成へ』

福原 俊一(京都大学、福島県立医科大学、Johns Hopkins 大学)

『長崎大学総診×熱帯医学研究所のハイブリッド=Global Family Medicine のキャリア形成』

山梨 啓友(長崎大学病院 総合診療科)

[開催の目的]

大学毎に違いがあるものの、総合診療部門には多様な役割が期待されている。大学ネットワーク委員会が企画した本シンポジウムでは、多様な分野で精力的に取り組んでいる大学総合診療部門の事例を取り上げ、学生や若手医師に大学での多彩なキャリアを具体的に示すとともに、大学総合診療部門としての方向性を探り、発展に向けた方策について議論する。

[概要]

第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会のシンポジウム「大学総合診療部門の躍進～役割と方策～」では、大学総合診療部門の多様な機能や役割が示されるとともに、大学の一部門として教育・診療・研究はもとより、大学運営や社会への貢献が求められていることが確認された。一方で、日本専門医機構による総合診療専門医養成が開始されて3年目を迎えたのに加え、サブスペシャリティとして新・家庭医療専門医などの進路が示されるなど、専門医取得後のキャリアデザインに注目が集まっている。大学の総合診療部門では、総合診療の実践に加えて、大学院進学、医学教育、臨床研究、社会貢献など多彩なキ

第11回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会



プライマリ・ケアと総合診療医学 ～学際的充実と伝承～

キャリアを選択することが可能であるが、多くの可能性を秘めている一方でその方向性とバランスは大学によって様々であり、捉えどころがなく、わかりにくいという指摘もある。本シンポジ

ウムでは、大学総合診療部門に求められる役割の中から、救急、研究、国際医療、地域づくりに焦点をあてて、各々の分野で精力的に取り組んでいる大学から活動内容や方向性などについて紹介してもらい、大学総合診療部門におけるキャリアデザインの具体例を提示する。その上で、紹介事例をもとに大学総合診療部門としての方向性を探り、発展に向けた方策について議論する。

＜シンポジウム 15＞

開催形式：ライブ配信

論文の質を高める：high volume academic GP への道(実行委員会企画)

企画責任者 松本 正俊(広島大学大学院医系科学研究科地域医療システム学)

座長：松本 正俊(広島大学大学院医系科学研究科地域医療システム学)

松島 雅人(東京慈恵会医科大学 臨床疫学研究部)

シンポジスト：『High volume (productivity)への道：Practice based research』

井上 和男(帝京大学ちば総合医療センター 地域医療学)

『地域でも研究に目を向けようー地域から世界へ発信ー』

川本 龍一(愛媛大学大学院医学系研究科 地域医療学講座)

『なぜ地域で研究を行うかー長崎大学総合診療科の取り組み』

山梨 啓友(長崎大学病院 総合診療科／感染症内科)

『ミッション志向型 Academic GP への道』

青木 拓也(東京慈恵会医科大学 臨床疫学研究部)

[開催の目的]

家庭医療および総合診療において質量ともに優れた水準の学術論文を世に出す研究者、すなわち high volume academic GP がどのような道を経てそこに至ったのかを検証し、初級研究者が中上級にステップアップするために何が必要かを実体験をもとに示す。またこの業界の学術活動性の未来像についても論じる。

[概要]

家庭医療および総合診療の学術性を高めるうえで、この業界から global academic society に出される論文の質を向上させることは重要であり、領域別専門科と肩を並べるうえで必要不可欠なステップでもある。そのためには研究者の裾野を広げる、すなわち初級研究者を増やすことが重要であることは言うまでもないが、それと同時に業界を牽引する high volume academic GP、すなわち中上級の研究者が一定数存在することは極めて重要である。本シンポジウムでは実際に high volume academic GP として活躍している4名の家庭医・総合診療医(若手2名、ベテラン2名)の講演を通して彼らがどのようなプロセスを経て high volume に至ったのか、何が彼らを high volume たらしめたのかについて実体験をもとに示す。そのうえで今後この業界が high volume academic GP を産み出し続けるためにどのような仕組みが必要であるか、またこの業界の学術活動性およびそのレベルのあるべき将来像についても話し合う。

>シンポジウム 16

開催形式:ライブ配信

日本版ホスピタリストの効果 -役割、効果、そして今後の展望-(公募企画)

企画責任者 栗原 健(浦添総合病院)

座 長:徳田 安春(群星沖縄臨床研修センター)
演 者:『日本版ホスピタリストの有用性-ホスピタリストシステム導入による病院全体
への質改善効果-』

栗原 健(浦添総合病院 病院総合内科)

『病院家庭医 日本版ホスピタリストの新たなサブスペシャリティ』

森川 暢(市立奈良病院 総合診療科)

『我が国のアカデミックホスピタリストが大学病院で今後目指すべき道』

和足 孝之(島根大学附属病院卒後臨床研修センター)

Harvard Medical School Master of Healthcare Quality and
safety)

[開催の目的]

日本版ホスピタリストの役割、効果、今後の展望について明らかにする。

[概要]

少子高齢化、単身世帯化、所得格差の拡大といった社会構造の変化に伴い、多併存疾患を有する患者数の増加、健康格差の拡大といった問題が生じている。これらの社会構造の変化の結果として、入院患者に必要な治療やケアも複雑になった。この社会で患者中心の全人的医療を実現するため、ホスピタリストが米国で20世紀終盤に登場し、現在までの20年間で約5万人にまで増加している。その背景には死亡率などの Clinical outcome は専門医と比較して非劣性で、入院期間や費用などの Quality はむしろ改善したというデータが示されたことが大きい。本邦においてもホスピタリストシステムは導入が少数の病院でなされているが、役割や効果は分かっていない。そのため本セッションでは本邦でホスピタリストとして働く医師を交えて、Clinical outcome と Quality についての結果と今後の展望を交えた議論を行いたい。

>シンポジウム(オンデマンド)

開催形式:オンデマンド配信

日本の過剰診断を減らすために(委員会企画)

企画責任者 綿貫 聡(東京都立多摩総合医療センター 救急・総合診療センター)

座長:綿貫 聡(東京都立多摩総合医療センター 救急・総合診療センター)

演者:『日本における過剰診断の問題』

栗原 健(浦添総合病院 病院総合内科)

『過剰診断:歪む疾患概念と Choosing Wisely キャンペーン』

小泉 俊三(東光会七条診療所(京都))

『患者は「過剰診断」が分からない』

北澤 京子(京都薬科大学)

『“Less is more”英国における過剰診断と対策』

佐々江 龍一郎(NTT 東日本関東病院 総合診療科/国際診療科)

[開催の目的]

今回のセッションでは過剰診断の問題について着目し、過剰診断に関する一般的な解説、日本や英国での過剰診断、Choosing Wisely Campaign との関連、海外で行われている Preventing Overdiagnosis Conference などの取り組みを紹介することで、日常診療の中での過剰診断の問題に関して考える機会を提供する。

[概要]

過剰診断は、その診断、または関連した治療が利益をもたらす可能性が低い場合、また必要のない診断がつけられた場合などに生じるものとされている。がん検診のスクリーニングの領域での話題として捉えられることが多いが、英国の RCGP(Royal Collage of General Physician)の Overdiagnosis group の声明においては、認知症の早期スクリーニングや健康診断が医学的な論拠なしに行われ過剰診断を招いた可能性を示している。

今回のセッションに於いては、日本・諸外国における過剰診断に対する問題点・取り組みなどを紹介することにより、日常診療の中での過剰診断の問題に関して考える機会を提供する。